

パーソンズのAGIL図式

—その形成における基本的問題—

溝部 明 男

AGIL図式が、社会構造の比較分析のために有効な準拠枠であるためには、その図式において設定されている諸次元が、相互に分析的に独立であり、しかも網羅的でないならばならない。このことの証明のためにパーソンズは、(一)小集団の実験室的研究によるペイルズの「四つのシステム問題」という概念の一般化、(二)パターン変数の組合せ、(三)内的・外的、手段的・成就的という二つの軸のクロスによる導出、という三つの異った方法に依拠している。パーソンズ自身は最終的には(三)を選択しているが、これらはそれぞれ、立証することが相当に困難な前提を含んでいるので、どれか一つの方法のみによって、満足すべき説明を与えうるとは思えない。本稿では、三つの方法が相互に補足しあい補強しあっているという観点から、特に、従来議論されることの少なかった(二)を重視して、『作業論文集』における議論を検討し再構成する。そして、この(二)のタイプの方法が、(a)五—一五三年の段階のパターン変数の理論、(b)行為が多機能的ではないという仮定、をまず前提としながら、(c)ある特定のパターン変数の間の「親和性」が他のパターン変数の組合せから区別しうる程に強い、という仮説を含んでいることを明らかにする。

パーソンズはこの「親和性の仮説」を明確化してはいないが、この仮説は図式の構成において非常に重要な位置を占めている。このことは、彼の理論が「行為理論」を基盤としているという一つの表現であると見なすことができる。

一 AGIL図式登場の背景

T・パーソンズの長期にわたる理論展開の歩みを俯瞰して、そこに一つの区切りを入れようとすれば、おそらく一九五一年か一九五三年あたりが一つの境目になるだろう。初期における中心の問題であった「ホップズの秩序問題」は、「共通価値統合」という概念化を経て、『社会体系論』における、文化・パターンの内面化の論理を伴った「制

度的統合」の概念化に至って、ほぼ論理的には完結しているとみることができ。この時期以降のパーソンズは、明らかに問題を拡大して、社会システムのレヴェルにおける一つの問題に集中するのではなくて、社会システムにおけるすべての問題を把握しようと試みていく。たとえば、『社会体系論』においては、「秩序問題」に直接対応する「制度的統合」の問題には、第二章までの数十ページがさかかっているだけで、残りの章の大部分は、標題通り、社会体系全般の分析に

主要な力点がおかれている。その際、動態的分析よりも静態的分析が先行しなければならないというテーゼに従って、彼はまず社会体系の構造分析を重視する。その場合、彼はある一つの社会の分析ではなくて、諸社会の構造の比較分析を目指している、ということには注意しておかなければならない。そこで、彼の求めることは、「体系を系統的に記述し、比較するために一般化された範疇体系を手に入れる」(1)ことである。そのために、彼はいくつかの準拠枠(2)を提起しているが、とくに彼が大きな期待をかけているものは、どのような体系もそれが何らかの形で持続するために充足しなければならないと考えられる「機能要件」(3)を確定することである。「機能の先行要件」(functional prerequisites)や「機能の緊急事態」(functional exigencies)の概念を利用することによって、構造の可能な変異の幅を、分析に先立って限定することができるだろう、という期待が『社会体系論』の中で繰り返し述べられている(4)。

けれども、アド・ホックでない「機能要件」の定式化は、五一年の段階では、結局試みられてはいない。このような背景の下で、五三年の『作業論文集』においてAGIL図式の端緒が開かれることになった。この時期以降のパーソンズの著作活動は、このAGIL図式の展開、応用、変奏あるいは拡大として比較の見やすい一貫性を示している。少なくとも五三年以後のパーソンズは、AGIL図式に全面的に依拠しており、従って彼の立場を、AGIL主義と要約しても過言ではないだろう。

おおむね以上の意味で、五三年を一つの境目と考えるのであるが、その前・後の関係は、全くの不連続というのではもちろんない。そう

ではなくて、それ以前の問題を、より広い問題領域の中の一つとして位置づけるような飛躍があったということである。たとえば、「秩序問題」あるいは「制度的統合」の概念化において対処されていた問題は、AGIL図式の内的・外的の区別に従えば、内的な領域の問題として位置づけられるというように。また、「主義主義」における「規範的要素」と「条件的要素」という基本的構図は、A↓G↓I↓Lというサイバネティックな制御の、及びその逆の「条件づけ」の、ハイアラーキーとして継承されている。このように考えるならば、AGIL図式は、あるいは五三年以前をも含めた意味で、パーソンズ理論の中核的な位置を占める概念装置であるといってもよいかもしれない。

けれども、AGIL図式の基礎的な骨組みについては、いくつかの問題が曖昧なままに残されているように思われる。パーソンズ自身は、この図式を展開し複雑化すること、つまり先を急ぐことに積極的で、図式の形成過程での諸問題をむしろかえすことには消極的である。また他の研究者の間でも、その形成過程に含まれている問題を重視した議論は比較的少なかったように思われる。そこで、本稿は、AGIL図式の基本的な問題点のいくつかを、その形成過程を追っていくかたちで検討しようとするものである。

二 問題の設定

AGIL図式についての議論は、五三年以来パーソンズが一つの書物あるいは論文を著わすたびに、多彩に展開され続けており、いまだに最終版と断定できるものはない。たび重なるモデル・チェンジは、

読者を相当に困惑させる。従って、AGIL図式を、(最近のシンボリック・メディア論も含めて) 全体的に考察するためには、文献学的な整理が必要であるとさえ感じられる。

しかし、本稿では、より基底的であると考えられる若干の問題に焦点をしばりたい。たとえば、何故AGIL図式の次元の数は、三以下あるいは五以上である可能性はなく、四であるというのか? この問題を、ここでは、「四つの次元の相互独立性と網羅性の問題」⑤と呼びたいのだが、パーソンズ自身は、この問題について、相対的に強い確信を一貫してもっているように見受けられる⑥。AGIL図式が四つの次元から成るといふ基本的骨組みについては、『作業論文集』以来、全く変更がない。パーソンズ自身のこの問題に関する考察は、主に『作業論文集』とそれに続くいくつかの論文に集中している。そこで、我々は、まず『作業論文集』の検討から始めることを必要とする。

周知のごとく、AGIL図式の原案は、R・F・ベイルズの小集団研究から得られている。では、何故パーソンズはベイルズの「四つのシステム問題」というアイデアを直接引用して一般化することをせずに、『作業論文集』にみられるようなかなりこみいった試行錯誤のプロセスを経た上で、自身の理論の中にとりこんでいくことが必要であったのだろうか? 第一の素朴な問いはこのように設定される。この問いと、先に述べた「次元の相互独立性と網羅性の問題」を結びつけて考えてみると、AGIL図式の基本的な骨格が形成される過程の中で、二つの主要なモデルを区別することができる。本稿では、それぞれモデルI・モデルIIと呼んで区別したい⑦。モデルIは、ベイル

ズの原案にパターン変数を接合するという形式をとるもので、主に『作業論文集』(以下この書物をWPと略記する)で展開されている。モデルIIは、モデルIのうちで、ベイルズの案に依拠する部分を、システム論的発想に基づいて、より網羅的に演繹しようという試みである。近年のパーソンズは、表面的にはもっぱらこのモデルIIのみに依拠している。しかし、本稿ではモデルIIはIと密接な関係をもっているという見通しに立って、ふたつのモデルをそれぞれ順に検討してみたい⑧。

三 モデルI (その一)

WPにおけるAGIL図式は、ベイルズとパーソンズ(およびシルズ)の協力によって構成されており、ベイルズ自身の基本的アイデアと、パーソンズによって代表される協同者達の手になる部分とを、明確に区別することはむずかしい。けれども、WPに先立ってベイルズが小集団の実験室的な研究において、独自に把握していた「システムの四つの機能問題」が、「たたき台」としての役目を果たしているとみて差しつかえないだろう。ベイルズの原案に対して、パーソンズが既に展開していた概念装置との接合をはかることによって、AGILの基本的な骨格が形成されてゆく。この試みの最初の出発点は、WP第三章の図3に示されている⑨。ここでは、ベイルズの図式として、小集団研究のためのコミュニケーション・カテゴリーの組合せの分析からえられた、「適応的」(adaptive)、「道具的」(instrumental)、「統合的」(integrative)、「表出的」(expressive)という、四つの機能問題ないし次元が表示されている。この図式にはほぼ対応するもの

は、一九五〇年のペイルズの著書にすでに見いだされる⁽¹⁰⁾。五〇年の時点で、ペイルズとパーソンズの間に、何らかの交渉があったかもしれないと推測しうるが、定かではない⁽¹¹⁾。

右の図において、ペイルズの「四つの機能問題」に対応して、パーソンズ側からは、第一に、逸脱のタイプロジーと社会統制の図式が結合されたもの、第二にパターン変数の組合せが対照されている。この対照の目的は、ペイルズの原案を、パーソンズの理論的文脈へと翻訳しつつ取入れること、またそれによって、図式のより一般的な妥当性について洗練することであると考えられる。この観点からみるならば、第一の「逸脱＝社会統制」の図式との接合は、かりにうまくいったとしても、実験的な小集団研究のレヴェルと、逸脱あるいは社会統制という特殊なレヴェルとの間の、単なる翻訳に終わってしまうおそれがある。そのような翻訳では、構造分析の一般的な図式としての有効性を求めるパーソンズの期待に十分応えることはできないだろう。

その上、逸脱の諸タイプと、社会統制の諸カテゴリーとの一対一対応は、必ずしも成功しているとは思えない。どのタイプの逸脱も、社会統制のカテゴリーとしてあげられているステップを、順にひととおり通過して、適応的な行為へと復帰すると考えられていたはずだからである⁽¹²⁾。逸脱のタイプと社会統制のステップを、一対一対応させるには、無理がある⁽¹³⁾。

次にパターン変数の組合せとの接合を問題にする。WPにおいて、ペイルズの原案に「パターン変数」を接合する試みは、二・三・五章で展開されているが、二・三章の見解は、五章では大幅に改訂されている。このような混乱がみられることから、モデルIにおいて各

次元に対応づけられているパターン変数の論理的意義は小さくて、単なる衣装にすぎないと解釈できるかもしれない。けれどもここでは、そのような混乱は、原稿が印刷に付される際に介在した特殊な事情⁽¹⁴⁾のせいであると軽く考えておいて、まず第一に、各次元へのパターン変数の接合がもっている理論的意義を考慮することが重要である。第一に、AGIL図式は、その形成の過程からみると、第一義的には、システム（この場合には実験室における課題解決の小集団）の時間軸上の運動を記述するための座標軸ないし諸次元である。システムの運動の単位は、当該の小集団全体であり、さらに小集団の運動をその要素である諸単位行為の「合成」とみなす手続きも与えられている⁽¹⁵⁾。したがって、行為者のレヴェルを、集団にとるにせよ、個人にとるにせよ、行為を記述するための概念が必要となる。この点で、行為のオリエンテーションのパターンを分類する概念装置であるパターン変数が役立つ。ペイルズのコミュニケーションの十二のカテゴリー⁽¹⁶⁾と比較すれば、パターン変数の方が、変数群の定義とそれらの相互関係がより明瞭であり、またコミュニケーションとしての行為だけでなく、すべての行為に適用可能である点で、より一般的である。さらに、役割・規範・価値などの、行為システムの分析的諸要素にも適用可能であると考えられるので、理論的な射程範囲もより広い。ペイルズの「四つのシステム問題」というカテゴリーも、ある意味では、行為を記述するものであるが、それは、行為がシステム全体に与える影響ないし効果という視点からである。他方、パターン変数は、いわば行為がそれ自体を記述するものである。パターン変数をペイルズの原案に接合することは、どのような行為が、システムの運動の

行為空間における位置をどのように左右しようかという、システムとその要素の行為の関係について、より深く分析しようとする試みである。

第二の意義は、四つの次元の相互独立性と網羅性の問題にかかわっている。ペイルズの方法のみに立脚する場合には、この問題に対して相対的に弱いといわざるをえない。この問題に対応する一つの方法が、パソンズ自身が明言しているわけではないが、パターン変数導入の試みであると思われる。パターン変数は、それが五組で十分であるという網羅性について、また一組のペア内部の相互排他性について、五年の段階でパソンズが相当の自信をもっていた概念装置である。WPにおいてあれほど混乱しつつも、パターン変数にこだわっているのは、以上の二つの問題の重要さと困難さのためであろう。

次に、パターン変数を各次元に割当てての手続きを検討する。五組の変数 A のうち、自己指向—集合体指向 (self vs collectivity orientation) の一組は、考慮から除外されるといわれる。この変数は、諸行為から成るあるシステムが、何らかのより上位のシステムを構成しうるのかどうか、という問題に、もっぱら関わっている⁽¹⁸⁾。しかるに今、問題にしている文脈においては、小集団という社会システムが構成されていることは前提にしている。したがって、今の問題のためには、この変数は問題にする必要はない。また、行為システムにおける自己指向と集合体指向のどのようなバランスが社会システムにおける・非存立と結びつくのか、という問題は、容易ではないが、少なくともここでの問題とは別の問題である。パソンズ自身の説明を多少補足すると、以上のように解釈できるだろう。

したがって、AGIL図式との関連で問題になるパターン変数は、周知のごとく、限定性—無限定性、感情中立性—感情性、遂行—資質、普遍主義—個別主義というそれぞれ二つの選択肢からなる四組である。前の二つのペアは、態度ないし動機づけの側に属し、後の二つ

表 1 略 語 表

A ₁	限定性 (Specificity) — 無限定性 (Diffuseness)	A ₁₁ —A ₁₂
A ₂	感情中立性 (Neutrality) — 感情性 (Affectivity)	A ₂₁ —A ₂₂
O ₁	遂行 (Performance) — 資質 (Quality)	O ₁₁ —O ₁₂
O ₂	普遍主義 (Universalism) — 個別主義 (Particularism)	O ₂₁ —O ₂₂

のペアは、客体ないし状況の範疇化の側に属するといわれる¹⁹⁾。便宜のために、態度の側の二つのペアを、 A_1 、 A_2 、客体の側の二つのペアを、 O_1 、 O_2 と略記し、さらに、それぞれのペアに含まれる選択肢を表わすためには添字をさらに重ねて、右に列記した順で、「 A_{11} — A_{12} 」、「 A_{21} — A_{22} 」、「 O_{11} — O_{12} 」、「 O_{21} — O_{22} 」と表記する(表1)²⁰⁾。

四つの次元へのパターン変数の配列に関して、 WP では、二つの異なった方法が区別できる。一つは、パターン変数二つの組合せを各次元に割り当てるもので、他の一つは、パターン変数四つの組合せを割り当てる方法である。ここでは、便宜のためにそれぞれの方法を「タイプ1」、「タイプ2」と呼んで区別したい。パターソンズは、最初、「タイプ1」の方法で試みており、それらの説明づけに苦心している²¹⁾。この組合せは「セット1」と呼ばれている。この「セット1」をそのまま各次元に割り当てることによって、「タイプ1」が導きだされている²²⁾。

けれども、パターソンズは、「タイプ1」を捨てるのか捨てないのか不明確なままに、「タイプ2」へと進んでいる²³⁾。その段階では、「セット1」につけ加えられて、突如として「セット2」が示されている(表2)。

この二つの「セット」から、パターソンズは、ほとんど説明ぬきで、「タイプ2」を導き出す。その手続きは示されていないが、推測すれば、おそらく次のようなものである。「セット1」から、たとえば、 A_{22} — O_{11} をとりだし、次に「セット2」において、 A_{22} と O_{11} の相手方を一つずつとりだして、 A_{11} — A_{22} — O_{11} — O_{22} という四つの変数からなる「組合せ」²³⁾を得る(以下同様)。本稿では、「タイプ2」の方式に

よってパターン変数が各次元に配列される図1を特に重視するので、また WP における $AGIL$ 図式の最終的な形式はこれであると考えられるので、便宜のために、モデルIと呼んでおきたい(図1)。「セット1」、「セット2」を経てモデルIに至るパターソンズの手続

表 2

セット1	感情性 (A_{22}) — 遂行 (O_{11}), 中立性 (A_{21}) — 資質 (O_{12}) 限定性 (A_{11}) — 普遍主義 (O_{21}), 無限定性 (A_{12}) — 個別主義 (O_{22})
セット2	限定性 (A_{11}) — 遂行 (O_{11}), 感情性 (A_{22}) — 個別主義 (O_{22}) 無限定性 (A_{12}) — 資質 (O_{12}), 中立性 (A_{21}) — 普遍主義 (O_{21})

図1 モデル I

	中立性 (A ₂₁) 普遍主義 (O ₂₁)	感情性 (A ₂₂) 個別主義 (O ₂₂)
限定性 (A ₁₁) 遂行 (O ₁₁)	適応 (Adaptation)	目標達成 (Goal Gratification)
無限定性 (A ₁₂) 資質 (O ₁₂)	潜在性 (Latency)	統合 (Integration)

(WP, Chap. 5, p. 182 参照)

きについて問題とすべきは次の事柄である。「セット1」のそれぞれ
の結びつきについては、一応の説明が与えられているが、⁽²⁴⁾「セット
2」は全く説明なしで提出されている。「セット1」では、たとえ
ば、A₁₁については、O₂₁との排他的な結びつきが説明されているのに、
他方「セット2」で、A₁₁がO₁₁と結びつけられるさいには、何のコメン
トもなされていない。とすれば、結局、「セット1」の説明も中途半

端なもので、四個の「組合せ」の説明はないに等しいと要約せざるを
えない。

さて、ここで、いくつの変数を組合わせるべきなのか、という基
本的な問題を検討しておきたい。五一年の著作に戻ってみると、どの
ような行為も、常に五組のパターン変数のペアから、それぞれ一つず
つをとりだした組合せをもっていると考えられている⁽²⁵⁾。AGIL
図式との関連においては、「集合体指向—自己指向」という変数は、
すでに述べたように、ここでの文脈とは別の問題に関わる変数と考え
られるので、表記上は省略することができる。したがって、組合わせ
は、A₁₁—O₂₁というふうではなく、A₁—A₂—O₁—O₂というスタイルでな
ければならない。すると「タイプ1」では、省略が用いられている
⁽²⁶⁾と考へざるを得ない。つまりA₁₁—O₂₁という表記には、実際には、
A₁₁—O₂₁—O₁₁—O₂₁、A₁₁—A₂₁—O₁₂—O₂₁、A₁₁—A₂₂—O₁₁—O₂₁、A₁₁—A₂₂—O₁₂—O₂₁
という四つのクラスターが含まれることになる。そうすると、「タイ
プ1」の延長上には、「モデルI」とは異なって、一つの次元に四種
のクラスターが対応する図式があることになる(この図式は、パーソ
ンズの著作に現われたことはないが)。しかし、本稿では、「タイプ
1」は「タイプ2」の部分的説明であると解釈して、以下では「タイ
プ1」を考慮の対象からは除外する。すると「モデルI」におけるパ
ターン変数の配列は、「四つの次元の相互独立性の問題」に関して、
非常に好都合である。そこでは、水平また垂直方向で隣りあった二つ
の次元はどれも、パターン変数の定義上、相互に排他的な変数を二つ
ずつ含むことになり、この問題に関して、きわめてクリアである。
では「四つの次元の網羅性問題」についてはどうであるか。

四 モデルI (その二) —— 親和性の仮説 ——

パターン変数の組合せによって、四つの次元の網羅性を保証するということを、次のような問題に翻訳して考えてみよう。すなわち、パターン変数を四つずつ組合せるとすると、論理的な可能性としては、 $2^4 = 16$ 個であるはずなのに、「組合せ」以外の他の十二個の組合せは、何故捨てられるのか？ というのは、一つの次元にパターン変数の一つの組合せが対応すると仮定しておく、もしも何らかの意味で、四個の「組合せ」と同じ資格をもつ第五の組合せがある場合、第五の次元があるはずだということになるからである。この問題に関して、たとえばある箇所では次のような説明がなされている⁽²⁴⁾。捨てられるべき十二個の組合せは、行為空間の座標のマイナスの次元に相当するもので、けれどもたとえば動機づけの力はゼロ以下の値をとらないし、また統合の次元がゼロ以下ということは、システムの解体を意味する。したがって、ここでの考慮からは除外してよい、という説明である。このアイデアは、部分的には、たしかに興味深いものを含んでいるけれども、全体としてみるならば、納得できるものとは思えない。

この問題に答える比較の容易な方法として、「四つのシステム問題」の概念を介在させる説明が考えられる。たとえば、「適応」という機能を果たすためには、行為者は、システムの外部に存する客体を、ある一定の性格を有するあるクラスの客体の中の一つの客体として「普遍的な見地から、またそれがどのような効果をもたらさうのか」という「遂行」の見地から判断し、そして、その客体に対して、行

為者は、ある「限定的」な関心をもってザッハリツヒに、つまり「感情中立的」に、向きあわなければならない、という如き説明である⁽²⁵⁾。実際パターンズは、このタイプの方法を用いて、明快な説明を展開している。けれども、その場合には、機能要件の概念化の網羅性を、前提にしている。四つの機能問題と同じ一般性の水準で、第五の機能要件がありうることを、論理的に排除できてはいない。パターン変数との関連づけを検討することの主要な意味の一つは、この問題をめぐっていたはずである。この観点からすれば、右のタイプの説明を採用することによって、この問題に関して一つの妥協をしているのではないかと考えられる。しかし、ここでは、パターン変数の四組の「組合せ」が、「四つの機能問題」を介在させることなく、どのような意味で、他の十二組の組合せから区別されるのか、という問題をもう少し続けて考えてみたい。

次のようなパターンズ自身の短かくさりげない言明が手がりとなる。

「態度—客体の線を横切る他の組合せの可能性は論理的にまた経験的にありうるが、しかしそれらは上の二つのクラスター(セット1とセット2を指す——引用者)とくに第一のセットに識別しうるような内在的親和性(inherent affinities)をみつけているとは思えない」⁽²⁶⁾

この引用文の中で、とくに「内在的な親和性」という概念に注目したい。これは、機能要件論とは独立のレヴェルで、いわばパターン変数の理論それ自体のレヴェルにおいて、新しい展開を可能にするような洞察である。けれども、パターンズはこの方向をそれ以上展開して

はいない。

K・メンズイズは、右の引用文に示されているパーソンズの断片的なアイデアとはおそらく独立に、しかしパーソンズの洞察を展開する方向で、次のような仮説を独自に提起している。メンズイズによれば、「組合せ」以外の十二組のパターン変数の組合せによって性格づけられる行為は、混成的な意味 (mixed meanings) をもっており、存在しうるけれども不安定で維持されるのがむずかしく、遅かれ早かれ消失するか、あるいはより安定的なタイプへと移行しやすいタイプであると考えられる³⁰。彼は、この仮説を裏づける一つの例を、『社会系論』の中から引用している。その箇所において、パーソンズは、一般に、普遍主義—感情性—無限定性の組合せをもつ指向は、維持されることが困難であって、個別主義—感情性—無限定性へと容易に移行しやすい、その具体例として、「宗教的普遍主義」が「宗派的個別主義」に変化しやすい傾向がある、と指摘している³¹。

メンズイズの仮説は、モデルIに現われているパターン変数の「組合せ」と、捨てられている他の組合せとの差別的な取り扱いが、どのような基準に基づいているのか、という問題に対して、「安定性—不安定性」という概念によって、一つの明快な答を提供している。もちろん、それは何故そうなのかという説明ないし論拠を含んではないが、より具体的に検証可能な命題へと定式化することによって、問題を一步前進させていると評価できる。そこで本稿では、メンズイズの仮説を、先に引用したパーソンズの「親和性」の概念と結びつけて、とくに「親和性の仮説」と呼びたい。すなわち、パターン変数を A_1 — A_2 — O_1 — O_2 という形式で組合せてえられる十六個の組合せのうち、

「モデルI」にみられる四個の組合せは、「内在的な親和性」に関して、他の十二個の組合せよりも、とくに区別しうるほどの高い水準にあるだろう。さらに、「内在的な親和性」とは、個々の状況的な他の要因にかかわらずなく、ある組合せをもつ行為が示す「安定性—不安定性」のことである、と定義できるだろう。

この「親和性の仮説」の妥当性が確認され、そして、親和性の高い組合せとある機能の一对一対応を仮定すれば、 $AGIL$ 図式の「網羅性の問題」について、大幅な前進が可能となることは、いうまでもない。ここで、親和性の検討の便宜のために、 A_1 — A_2 — O_1 — O_2 という組合せを、より小さな単位へと分解することを考えてみよう。

すでに指摘したように、モデルIにみられる四個の「組合せ」に至るパーソンズ自身の手続きは、捨てられなければならない。そこで、モデルIを眺めているとすぐにわかるように四個の「組合せ」は、 A_{11} — O_{11} 、 A_{12} — O_{12} 、 A_{21} — O_{21} 、 A_{22} — O_{22} を基本的単位として、これらを表3のようにさらに組合せて、導出される (表3)。

このような手続きを考えてみると、以下のことに気づく。第一に、上の四つの基本的単位 (A_{11} — O_{11} 、 \dots) は、パーソンズ自身の「セット2」と同一である。したがって「セット1」は、モデルI導出のためには不要である。第二に、このように基本的単位をクロスさせるということは、たとえば A_{11} — O_{11} はA次元とG次元に対応させているのだから、AとGから成る、より上位の次元を設定していることと同じである (同様にLとI、AとL、GとI)。これは、システムの第一次のサブ・システムが、 $A \cdot G \cdot I \cdot L$ という四つの次元であるのではなく、その中間に、より包括的なサブ・システムが考えられると

表 3

	$A_{21}-O_{21}$	$A_{22}-O_{22}$
$A_{11}-O_{11}$	$A_{11}-A_{21}-O_{11}-O_{21}$	$A_{11}-A_{22}-O_{11}-O_{22}$
$A_{12}-O_{12}$	$A_{12}-A_{21}-O_{12}-O_{21}$	$A_{12}-A_{22}-O_{12}-O_{22}$

いうことを示唆している。しかし、この問題は、モデルⅠの段階では、明確にされていず、モデルⅡの登場を待たなければならぬ。

第三に、今の手続きのうちで、クロスさせる段階での組合せは網羅的である。したがって、最終的に排除される組合せは、 $A-O$ の組合せをどう選ぶかという段階ですでに排除されていると考えられる。そこで、モデルⅠに現われない他の十二個の組合せを、表3のようにして、導出手続きを考えてみると、 $(A_{11}|O_{12}, A_{12}|O_{11})$ と $(A_{21}|O_{22}, A_{22}|O_{21})$ をクロスさせ、また、このうちのそれぞれ一方を図2の

片方とクロスさせることによって、得られる⁽³²⁾。つまり、排除されている他の十二個の組合せには、 $A_{11}|O_{12}, A_{12}|O_{11}, A_{21}|O_{22}, A_{22}|O_{21}$ のうち少なくともどれか一つのペアが必ず含まれている。「親和性」という言葉を使って、述べてみると、 $A_{11}|O_{12}, A_{12}|O_{11}, A_{21}|O_{22}, A_{22}|O_{21}$ というグループと、 $A_{11}|O_{11}, A_{12}|O_{12}, A_{21}|O_{21}, A_{22}|O_{22}$ というグループの間には、「親和性」に関して、大きな差があり、前者のグループは、とくに親和性の強いもの、後者のグループは、とくに親和性の弱いものであると表現できる⁽³³⁾。こうしてみると、先に $A_1|A_2|O_1|O_2$ の組合せに関して述べられた「親和性の仮説」は、 $A_1|O_1$ および $A_2|O_2$ の組合せの問題へと還元できることがわかる。つまり、例の四つの「組合せ」の親和性が、他の十二個の組合せよりも、区別しうるほど高いということをいうためには、各々四つの要素から成る十六個の組合せについて逐一検討する必要はなく、たとえば、「限定性」は「資質」とは結びつきにくく、「遂行」と結びつきやすい、というように、各々二つの要素から成る八つの関係を検討すれば、十分ということである。これは要するに問題を単純化しえたということである。

具体的に検討してみると、たとえば、客体を、それがシステムにどうなるような効果・作用を及ぼすかという視点（「遂行」の変数）から見る場合には、行為者の関心は、客体の問題となつてある側面に「限定」されているのであつて、それ以外の広い側面に対する関心（「無限定」）とは両立しにくいであろう。客体に対して「無限定」な関心をもって対している場合は、その行為は、客体を、広い文脈においてそれがもちうる意味の複合体として、見ているのであつて、ある特殊な文脈における作用のみを問題にしているわけではない。また、

目標達成に伴う即時的な充足が問題になっている場合（「感情性」）には、客体を、ある一つのカテゴリーに属する他と入れ替え可能な客体として「普遍主義」的に見るといふよりも、むしろ行為者と特定の關係をもっている、代替不可能な客体として「個別主義」的に見るのが普通であろう。

このように思考実験を試みてみると、「セット2」のペアの高親和性を証明しうる可能性が一応あるように思われる。しかし右のような説明が、同語反復を部分的に含んでいるのではないかという可能性もある。けれども、四組のパターン変数がすべて独立の変数であるのかどうかという問題は、パターン変数の理論それ自体の検討を要する問題であるので、ここではこれ以上立ち入ることができない。ここでの当面の問題との関連においては、 $A_{11}|O_{11}$ 、 $A_{12}|O_{12}$ 、 $A_{21}|O_{21}$ 、 $A_{22}|O_{22}$ というグループが、他のグループと区別しうるほどの安定的な結びつきを、それぞれもっている主張しうるかどうか、重要な点なのであって、その際に、事実的な問題として検証を要する「親和性の仮説」に依存するのか、それとも、定義それ自体あるいは定義からの論理的な演繹に部分的に依存することができるのかどうかということは、いわば第二義的な問題であるといえよう。

パターンズは、おおむね以上のごとく再構成される議論の筋道をたどって、四つの次元が相互に独立で、網羅的な図式として、モデルをI提出している。その過程で、「相互独立性と網羅性」の問題が、パターン変数との接合に大きく依存しているという点は、とくに注目されてよい特徴である。

五 モデルI（その三）

各次元の内容については、ベイルズの原案に若干の変更がなされているが、ここでは、もっとも大きな変更が加えられている「潜在性」の次元についてのみ言及したい。パターンズはI次元を、最終的には、システムのメンバー間に相互作用が観察されない位相、つまりシステムとしての「無活動」(inactive)の状態と規定している⁽³⁵⁾。会社を例にとれば、これは社員たちが出勤していない夜や休日のことである。システムの構成要素である相互作用が一時的に中断されているという意味で、「潜在性」と名付けられている。相互作用が支障なく再開されるためには、この潜在性の位相において、一定の文化的パターンと動機づけのパターンがメンバーの内部において損われることなく、保持されていなければならない。この点をパターンズは「パターンの維持」と呼んで重視している。I次元には、「パターンの維持」と並んで「緊張処理」が位置づけられており、これは従来とくに問題視されてきた点である。パターンズがこれらを異なった要件として扱わないのは、おそらく、パターン維持に関しても「慣性の法則」⁽³⁶⁾を適用して考えているためではなからうか。つまり、パターン維持が実際に問題となるのは、何らかの妨害要因が介入してくる場合だけと考えると、その妨害要因を「緊張」という用語で一括しているのである。そしてこの用語でパターンズは、I次元で調整されなかったような個別的な「不満」と並んで、とくに道徳と現実の不一致という「意味の問題」⁽³⁶⁾を念頭にうかべているのではないかと推測しうる。いずれにせよ、二つの異なる要件が並列されているというよりも、む

しる「パターン維持」が主であり、それと関連する限りで「緊張処理」が追加されると理解しておきたい⁽³⁷⁾。

さて、このI次元の規定の仕方に明らかなように、各次元は、あるシステムの時間的な継起としてとらえられている。たとえば、行為の要素としての「文化パターン」は、通時間的に、システムに存在しているはずであるが、そのような分析的側面が、I次元の内容として考えられているのではない。つまり、分析的要素に分解される以前の具体的な社会システムが時間的な継起に従って各次元で考えられているのである。モデルIを機能要件の図式として考えてみると、それらの要件に関連してシステムが示す分化は、時間的な分化であって、共時的な構造の分化ではない⁽³⁸⁾。この点は、もともとベイルズの原案が、小集団の問題解決のプロセスとして、時間軸にそって展開されていることに由来している。その意味で、モデルIは、実験室的な小集団研究の文脈によって、大きく制約されていると考えられる。モデルIにおいては、四つの機能問題と、システムの「具体的な」状態が直接結びつけられており、システムの分析的側面あるいは要素が、「分析的に」問題にされているのではない⁽³⁹⁾。このような視点は、共時的な構造分化の程度がきわめて低い実験室的な小集団に対しては適合的であるが、よりマクロなレベルで社会システムを問題にする場合には、変更されなければならないだろう。ともあれ、モデルIにおいては、各次元の区別は、行為システムの分析的諸要素のシステム（たとえば、価値のシステム、規範のシステム）の区別と対応しているのではなくて、社会システムの時間的な分化と重なっており、各次元には、一定の時点での具体的な社会システムが位置づけられている。こ

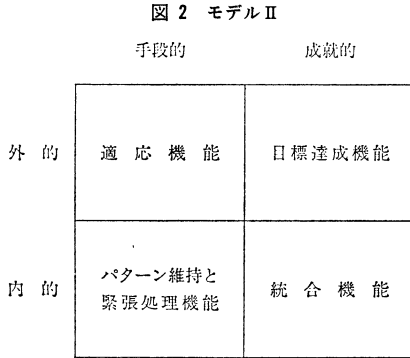
のことはモデルIの顕著な特色である。この関連で、パースンズのAGIL図式の今日までの適用の仕方には二通りの方法が区別できるように思われる。いわば、「具体的な」適用と「分析的な」適用の二つである。たとえば、I次元に法や規範が位置づけられる場合には、社会システムの一要素としての法や規範が分析的な観点で抽出されている。けれども同時にたとえば選挙民の集合体としての「社会共同体」(social community)が、I次元に位置づけられる場合には、具体的なシステムの分析的要素からなるシステムというよりは、社会システムの具体的な部分システムが意味されているという印象を強くうける(モデルIの時間的な分化という考え方は異なっているが)。これらの二つの用法をパースンズ自身は明確に区別してはいるが)。これらの中で混用される場合には、混乱の可能性を否定できないように思われる⁽⁴⁰⁾。

ところで初期パースンズの主要な問題であった「秩序問題」の位置づけを考えてみると、モデルIにおいて、パースンズはとくにI次元を、この問題に対応させるふしも窺える(「連帯」という概念の重視)。しかし、初期における「共通価値統合」の概念は、システムの分析的な要素として時間的な継起とは無関係に考えられていたのであるから、モデルIにおける基本的なパースンズベクトルとは相入れないものである。したがって、「秩序問題」は、原則的にはモデルIのすべての次元で、問題にされうると考えるのがより正確であろう。ただ、I次元設定の基本的発想は、G次元での目標達成のさいに犠牲にされた個別的な欲求充足や利害の対立の可能性といった問題を受け、I次元でシステムの再統合を図るという点にアクセントが置かれ

ているので、他の次元よりも相対的にI次元で、「秩序問題」をとくに強調しようという意味ならば、理解できる適用の仕方である。また、モデルIにおけるI次元には、小集団研究の影響を色濃く受けて、対面的な関係における「人間関係論」的な思考が、「秩序問題」という概念とは区別しうるレヴェルで、同時に流れ込んでいることも、あわせて指摘しておきたい。

六 モデルII

パーソンズはモデルIの他に、一九五八年以降もう一つのモデルを提出している(図2)。彼によれば、オープン・システムは、システ



(Parsons, 文献②, p. 7 参照)

ム外の環境とのインプット・アウトプットの交換を通じて環境に適応し、他方システム内の統合を維持するという相互に独立な二つの課題を果たさなければならない。このことから外的・内的 (external-internal) という軸を設定する。手段を準備する局面と、その手段を利用して課題を成就するという局面を区別して手段的・成就的 (instrumental-consummatory) という軸を考える。これらの二つの軸を交差させて四つの機能問題を導出し、これに関してシステムの構造が分化すると仮定している。各次元の具体的内容あるいは名称は、モデルIをほぼそのまま継承している。

モデルIIは、モデルIにおけるベイルズの原案に直接つながる「四つの機能問題」の再構成であるが、それとの対照において、モデルIIの特色は以下のとおりである。第一に、オープン・システムの根本的性格を基本にし、そこから二つの「二項対立」④を設定し、さらにそれらをクロスさせるといふ各次元導出の手続きは、ベイルズ原案に比べれば、網羅性に関して、信頼性が高いように思われる。モデルIにおける「四つの機能問題」は単に列挙的方法によって、リスト・アップされていたが、モデルIIはよりシステムマチックである。また、各次元が隣りあう他の一つの次元と、より上位の次元を構成していることが明確にされ名称が与えられている。このことによつて、各次元の配列の順がより明確になっている。モデルIにおいては、各次元の図式における位置は、主に「位相運動」の順のみに(また補足的に、パターン変数の組合せの共通項に) 依拠している⑤。第二に、モデルIIは、システム一般に適用しうるよう構想されており、モデルIの小集団論的影響を払拭している。パーソンズがモデルIIへ移行しなけ

ればならなかった理由も、以上の二つの問題のためと思われる。

モデルIIの妥当性は結局、二つの二項対立の適切さにかかっていると考えられるが、それに関して、若干の検討をしておきたい。外的・内的の軸は、直接的には、ホマンズ概念にヒントを得ているが⁽⁴³⁾、パーソンズ自身の文脈をたどれば、初期における intrinsic-symbolic⁽⁴⁴⁾ という対立概念にまで、遡れるだろう⁽⁴⁵⁾。手段的・成就的という軸は、伝統的な手段-目的図式に根ざしていることは明白であるが、問題は、この軸が、内的・外的の軸と同じレベルにあるかどうか、ということである。モデルIと比較すると、内的・外的の軸は、モデルIに適合すると思われるが、手段的・成就的の軸は、モデルIのA次元とG次元の関係にのみ対応しているのではないか⁽⁴⁶⁾？ またAとIとの、及びLとGとの（つまり交差する）関係も、手段的・成就的という軸で考えるのかどうか、問題があるように思われる。そこで、手段的・成就的の軸は、内的・外的の軸と同じ資格をもつのではなく、その下位次元化の段階で必要となる軸と考えるのが無難であろう⁽⁴⁷⁾。その場合に、L次元とI次元の下位次元化についてAとGの問題とは別に考えるという方法もありうる。パーソンズの発想は、L次元における人間の結合に介在するシンボルの機能を特に重視し、シンボルの生産、内面化、維持の機能を分担する次元としてL次元を設定するという構図であろうが、しかしL次元がシンボルを他の次元へアウトプットするという関係は、L次元とI次元以外の他の次元にも指摘できるので、それをどのように区別するかが問題である。ここではこれ以上立入らずに今後の課題としたい。

七 モデルIとモデルIIの関係

パーソンズはWPの第五章で、モデルIを提示した後、一九五六年の著作においては、モデルIからパターン変数を脱落させた図式を掲げ、「ノート」の文中で、「タイプ1」の形式で、パターン変数との対応を追加的に記述している。モデルIIが提起された文献⁽⁴⁸⁾においては、パターン変数との関係には踏みこまずに、モデルIIの方がより一般的な図式で、モデルIはそこから導出できると述べられているにとどまる。「パターン変数再検討」（文献⁽⁴⁹⁾）においては、パターン変数を配列させる方法とモデルIIの結合を図る図式が二つ提出されている。より基本的とみなされる一つの図式⁽⁵⁰⁾では、客体の様相（つまりパターン変数のO₁とO₂の組合せ）がGに、「客体への指向」（つまりパターン変数のA₁とA₂）がLに、そしてこれら二つのセットを関係づける様式としてAとI（「適応的メカニズム」⁽⁴⁹⁾と「規範的メカニズム」）とが位置づけられ、さらに各次元が下位分割されている。我々は、この図式をモデルIとモデルIIの統合の試みとして注目しなければならぬのであるが、この図式の複雑さは、細部の理解を非常に困難にしているし、また第一にこの図式の基本的性格、つまり各次元に割りあてられた内容と四つの機能問題との関連が、明確でないように思われる。たとえば、客体の様相と目標達成とが何故関連づけられるのか？ また、「客体への指向」と規範を、同じレベルで比較し分類することは適切なかどうか？ これらの疑問は、既に触れた「具体的適用」と「分析的適用」の問題と関連している。適用の二つの方法について詳しく検討する余裕はないが、ここでは、「具体的適

用」の方を選択して議論を進めたい。というのは、第一に、四つの機能問題の遂行は、具体的な行為（行為者のレヴェルはいずれであれ）によって担われるという認識を出発点にすべきであると考えるからであり、第二に、二つの異なった適用方法を並行させることは、混乱を招く恐れがあるからである。社会システムのある分析的要素ないし側面については、各々の次元からその分析的要素を抽出することができるから、そこでA G I L図式をその分析的要素の分類に用いることができる⁵⁰。つまり、規範と、「客体への指向」とは、それぞれの別個のA G I L図式によって分析されなければならない。このように考えると、問題にしている一九六〇年の図式は、四つの本来別個であるべき図式が、一つに図式化されているのではないかと思われる。したがって、その図式にあらわれている、モデルIとモデルIIとの関係を検討し、その成果を本稿の文脈に取入れることはできない。

その後のパソンズの著作においては、筆者の見限りでは、パターン変数との関係は、付随的に、あるいは注の形式で言及されることはあっても、積極的に図示されることはないようである。ちなみに、A G I L図式について、その基礎から近年のメディア論までの体系的な展開は、『アメリカの大学』（文献⁵¹）に見出されるが、そこでは、モデルIIのみが援用されている⁵²。このように展開史をみてみると、パソンズは、モデルIを背景にしながらも、モデルIIのみで、A G I L図式に対して、論理的に十分な説明を与えようと考えていると推測される。

おそらく、パソンズがモデルIIのみを強調するのは、第一に、モデルIにおけるパターン変数をめぐっての混乱、第二に、モデルIIの

演繹的方法についての自信に由来するのであろう。けれども、すでに検討したように、モデルIの問題点については、「親和性の仮説」を明示することによって、一応整理できると考えられるし、またモデルIIも論理的に必ずしも完璧とはいえない。モデルIIの二つの軸をクロスさせる方法についての個々の問題点については、すでに指摘したので繰返さないが、モデルIIの最大の難点は、それがもつばら演繹的な方法のみに依存している点であらう。この点に、「親和性の仮説」を明示した上でモデルIのもつ帰納的方法の可能性に注目する理由がある。つまり、モデルIIは、モデルIとは独立に、それ自体で、十分な自立性をもっているわけではないと判断される。さらに、「四つの機能問題」を担うのは、具体的な行為である、という見解に基本的に立つならば、行為を記述するパターン変数が備えられているモデルIには積極的な意味を認めることができる。以上の理由によって、本稿では、モデルIとモデルIIを明示的に重ね合わせ、A G I L図式は、主にパイルズの原案に由来する「四つの機能問題」、親和性が相対的に強く安定性が高いと仮定されるパターン変数の「組合せ」、およびシステム論的発想に基づく二つの二項対立という三つの図式によって重層的に構成されていると考えるべきであると主張したい。「四つの次元の相互独立性と網羅性の問題」について特に付言するならば、それらの三つの図式は、それぞれに弱点を含んでいるけれども、異なる観点からそれぞれ設定されている三つの図式が相互に支えあうことによって、より妥当性を高めようとする試みであると考えたい。

けれども、異なる発想に基づく図式の重層にメリットを認めるのではなくて、逆に、混乱を指摘する立場もありうるかもしれない。K・

メンズイズは、パーソンズ理論の中に、「行為理論」と「システム理論」が混在しており、それらは根本的に異なる観点に立つものであるから峻別されるべきであると主張している。この主張に従って、彼はA G I L図式についても、二つの理論的文脈における用法を区別している。それらは、本稿でのモデルIとモデルIIにほぼ対応する。彼によれば、モデルIにおけるパターン変数の四つの「組合せ」は、行為のオリエンテーションのタイプ、つまり行為の主観的な意味のタイプを示しているのだから、モデルIは、行為の主観的な意味の分類に用いられる。他方、モデルIIは、ある行為がシステム全体に対して及ぼす結果(Consequence)の分類である。そして、この二つの分類には、区別されてしかるべき方法的相異がある。これが第一の問題である。しかるに、往々にして、意図と結果は一致しないことがある。これが第二の問題である。そして、後者の問題に直面するとき、前者の問題を無視することができなくなる。以上のように、メンズイズの問題を要約することができる(52)。

メンズイズの、パーソンズにおける二つの理論的文脈の混在というテーゼは、広範にわたる多くの論点によって支えられているが、ここでは、A G I L図式についてのメンズイズの見解を、彼の根本的テーゼとはできるだけ切離して検討したい。彼が「行為の意味」というとき、それは「行為者の意図」のことを指していると解釈できる(53)。そして「適応的」であると意図されている行為は、 $A_{11} \mid O_{11} \mid A_{21} \mid O_{21}$ というパターン変数の組合せをもつとされる。このパターン変数の組合せによって、「行為の意味」は当事者と観察者の双方の視点において、一義的に定式化可能であると考えられている。従って、メンズイズ

ズの問題は、当事者と観察者のズレという問題ではなく、かりに両者の観点が一致しようと仮定しても、意図と結果のどちらに注目するかで、ある行為のA G I L図式における位置づけが変化する場合がある。そしてこのことは方法的問題に根差している、というものである。けれども、A G I L図式は、「四つの機能問題」に対して、どのような行為がどのような影響を及ぼしうるか、という発想を基本にしており、メンズイズのいう「意図」は、パーソンズ自身の文脈では、直接関連性のある要因とは考えられていない。またパターン変数を、メンズイズのいうような意味での「意図」の分類にかかわる概念と考えることはできないように思われる。

以上のようにメンズイズの主張を検討してくるならば、最後にメンズイズは、システム・レファレンスを混同しているのではないかと疑問視しうる。システム・レファレンスを行為者のレヴェルに置けば、その行為者にとっての目標を達成するうえでの手段とみなされる「適応的」行為も、その行為者を一つの構成単位とするような、上位システムにとっては、「適応的」行為であるとは限らない。メンズイズは、暗黙のうちに、行為者の日常的な世界においては、より上位のシステムに対する行為の意味づけよりも、パターン変数の言葉でいえば、自己指向が優位していると仮定しているのではないか。しかし、行為のオリエンテーションは、日常的意識と等置することはできない(54)。

さて、モデルI・IIが重なっているものとしてのA G I L図式が語りかける含意を、いくつか検討しておきたい。この図式では、四つの機能のカテゴリと、パターン変数の特定の組合せによって特徴づけ

られる行為とが、一対一に対応している。このことは、行為が多機能的であるという常識に反する。この常識に対しては、ある行為が複数のシステムに関連している場合の、あるいは時間のとり方による見かけ上の、多機能性、あるいはまた、一対一対応に向って、行為の分化が進行する、と考えることもできるだろう。しかしここでは、パーソンズにおいては、同時に遂行することの不可能な相互に独立な機能問題、及びそれに対応して分化する構造という考え方が出発点となっており、従って次元と行為との一対一対応は、この図式のいわば公理的な前提となっていることを指摘するにとどめたい。

パターン変数の組合せと各次元の一対一対応は、パターン変数の組合せとモデルIIの二つの軸との対応と読みかえることもできる。これによって、たとえば、システムと環境との一定の関係を確立するという問題に関わる「外的」な領域では、客体を「遂行本位」の見地から「限定的」に、いわば「もの」として見、他方、構成単位のパターン維持と単位間の統合に関わる「内的」な領域では、客体を「資質本位」の見地から「無限定的」に、いわば「人格」的に見る、というように、人間の二つの基本的なオリエンテーションのタイプが示唆されていると解釈できる⁶⁶⁾。

次元と行為の一対一対応という公理の副産物として、「関連―非関連」という概念を考えたい。ある行為の機能がプラスかマイナスかという判断に先立って、その行為がどの次元にもっぱら関連させられて判断されるべきかという問題があり、この関連性を「関連―非関連」という用語で示したい。これは「正機能―反機能」とは区別されるべきである。この概念を日常的な言葉でいいかえれば、次元は、行為状

況のなにほどか客観的な状況規定、たとえば「その場合の雰囲気」、また「非関連的」な行為とは、「ピントはずれな」行為、「わかりにくい」行為、「場ちがい」な行為などと表現されるだろう。非関連な行為は、その成功・失敗が云々される前に、状況規定を共有する人々によって、驚かれ、冷笑され、無視されるだろう。たとえば、愛に關して問題となっている場面で、仕事に気を奪われているような場合である。

八 おわりに

社会学の特色が「複眼的思考」⁶⁶⁾にあるとするならば、AGIL図式は、そのような思考を表現する一つの代表的な図式である。けれどもパーソンズ自身は、決して相対的ではない意味において、この図式を主張している。この主張を理解し検討するためには、かなり骨の折れる作業を必要とするだろう。本稿はそのような作業の出発点に立ちとうとする試みにすぎない。

本稿では、とくにモデルIつまりパターン変数との関係を重視した。AGIL図式を、単に「機能要件」の図式としてのみ見る観点からは、パターン変数との関係は無用の長物と思えるかもしれない。一般に、「要件」をリスト・アップしようとする場合、リストの数が限定されるためには、それらの相互独立性と網羅性を重視しなければならぬ。この問題に関して、単純な枚挙の方法では不十分であろう。その意味で、モデルIIは高く評価される。けれども、「何が必要か?」という要件論的文脈にとどまる限り、結局は何ほどの恣意性につきまとわれざるをえない。そこで、いくつかの異った文脈からの論理構

成と相互の翻訳可能性の意義をもつと評価する必要がある。たとえば、「手段的―成就的」を「手段―目的」関係の一変形とみて、手段と目的が連鎖的に相互に入替わることから、A次元とG次元は独立の次元を構成して、一括されるべきだと考えられるかもしれない。けれども、パターン変数との対応づけに眼を向ければ、AとGとの区別は、「中立性―普遍主義」と「感情性―個別主義」の変数によって定義されており、つまりAとGの各次元は、それに対応する行為のタイプの相異によって、相互に独立な次元として設定されているのである。従って、「手段的―成就的」の二項対立は、「手段―目的」の長い連鎖の一部と同一に考えられているのではないことがわかる。

さらに、図式の妥当性の根拠の多様化という見地から考えると、演繹的方法に基づくモデルに対して、モデルIIに対して、モデルIにおけるパターン変数との接合は、経験的レヴェルへのレファレンスが明確になっており、その帰納的方法の可能性は見逃されるべきではない。

パーソンズのAGIL図式を修正する見解がすでにいくつか提出されているが⁽⁵⁾、それらの多くはモデルIIのみを問題にしており、パターン変数との関係が省みられることはあまりにも少ない。けれども、本稿の見解に照らしてみると、モデルIとの関連を検討することなしに、あるいはその代替物を提出することなしに、各次元の位置づけを変更するという修正の方向は、極端にいえば、枚挙的方法に近づく危険性があり、かなりの問題点を含むといわざるをえないだろう。

振返ってみれば、AGIL図式にパターン変数が接合されていることは、諸社会の構造分析のために有効な準拠枠を入手するという彼の当初の構想に由来している。「構造」を行為あるいは役割行動の安定的な諸関係と考えておくならば、行為を直接記述する概念装置、いわば「行為理論」がこの図式に接合されていることは、彼の趣旨にてらせば、不可欠であったろう。さらに彼は、モデルIとIIを重ね合わせることも試みている。このことは、パーソンズの構想の実現のためには、その問題の困難さのゆえに、できるだけ多様なアプローチを動員し、それらの間の相互補強関係に依存せざるをえないということを物語っている。

(1) SS, p. 21, 邦訳、二七頁(文献③)。本稿ではしばしば引用する文献は略語で示す。後掲文献表を参照されたい。

(2) たとえば、(1)親族、(2)道具的業績構造と成層、(3)領土性と力、および権力体系の統合、(4)宗教と価値統合、という四つの「経験的集群」を準拠点にする方法(SS, pp. 153~167, 邦訳、一六一―一七一頁)。

(3) 『社会体系論』G中では「functional prerequisites, functional imperatives, universal imperatives, imperatives of compatibility」などの用語が、相互関係が不明確なまま用いられている。本稿での用語は簡単に「機能要件」としたい。

(4) たとえば、「そうした体系が持続的な秩序を確立したり、あるいは発展的変動の整然とした過程を辿るためには、一定の機能的先行要件が充足されなければならない。この機能的先行要件を検討するのが当をえている。というのは、その検討によって、社会体系の構造を分析するための準拠点に関してのいっそう広範な分析に適している道具立てがさうこうになるからである」(SS, p. 27, 邦訳、三四頁)。他にSS, p. 167。

邦訳、一七三頁、なども参照。

(5) A G I L 図式に、パーソンズが託している比較、分析に有効な図式という要請に照らしてみれば、この問題は第一級の重要性をもっている。つまり、ある特定の対象ごとに次元を変更するのでは、比較として有効ではないという立場が採られている。

「次元の相互独立性と網羅性」という用語による問題の定式化は木村洋二が既に行っている。しかし問題に対処する方法は本稿のそれとは異っている(木村洋二「機能的系理論の根本問題」『ソシオロジ』第一九巻三号、一九七五年、二九頁)。

(6) 近年パーソンズが精力的に展開しているシンボリック・メディア論は、A G I L 図式に全面的に依存している。このことから彼の自信の程が窺われる。

(7) モデル I・II という呼び方は、R・デュービーン及び新陸人のそれとは異なる。新陸人「社会分析図式の形成と展開」(田野崎昭夫編『パーソンズの社会理論』誠信書房、一九七五年、所収)参照。

(8) 以下の行論では、図式の適用は、社会システムのレヴェルに限定し、また各次元の低位分割の問題には立入らない。

(9) WP, p. 74.

(10) R.F. Bales, *Interaction Process Analysis: A Method for the Study of Small Groups*, Addison-Wesley, 1950, p. 127.

(11) ベイルズの前掲書の序文には、パーソンズの強い影響が明記されているが、具体的な交渉の経緯は明らかではない(Bales, *op. cit.*, p. xi)。

(12) SS, Chap. 7.

(13) この方法による A G I L 図式の論理づけは、WP において一貫して追求されてはいず、途中で捨てられていると考えてよい。ただし一九五五年の著作においては、A G I L 図式と社会統制のステツプとの対応が、重要

な出発点となつてゐる。Family, Socialization and Interaction

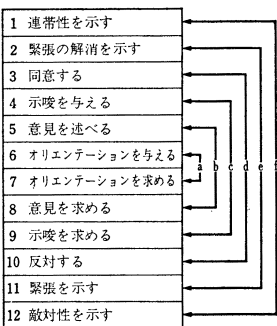
Process, The Free Press, 1955, p. 39. 橋爪貞雄他訳「核家族と子供の社会化」黎明書房、一九七一年、上巻六八頁、参照。しかし同書においては、A G I L 図式の一般的な妥当性については、それを前提とし、社会化というテーマへの一つの応用として右の対応関係が示されている。つまり、A G I L 図式と社会統制の図式の接合という問題の論理的な位置が、二つの文献において異なっているのである。従つて本稿ではこれ以上この問題には立入らない。

(14) 各論文は脱稿後直ちに印刷へ回され、全体としての手直しを経ることなく出版されている(WP, Preface, p. 63, n. 1, p. 163, n. 1)。因みに、その後のこの書物は「そのままの形では再版されなかつた」と述べられてゐる(Parsons, *Social Structure and Personality*, The Free Press, 1964, p. 1, n. 1. 武田良三監訳『社会構造とパーソナリティ』誠信書房、一九七三年、一八頁)。しかし、その後一九六七年にリプリント版が出ている。Action Theory and the Human Condition, The Free Press, 1978, P. 494)。

(15) WP, p. 90, p. 168.

(16)

ベイルズの12のカテゴリー



適応的問題 a-b
道具的問題 c
統合的問題 f
表出的問題 d-e

(WP, p. 65, p. 74, p. 112, p. 189参照)

(17) 五三年の論文で、従来の五組の変数に「短期的―長期的関心」という第六の変数が付加えられているという見方もある(文献⑤ p. 96, n. 13; 新睦人、前掲論文、六四頁)。しかし、六〇年の重要な論文には現われていない(文献⑧)。また七〇年の論文の中で、「平等―不平等」をパターン変数に加えてはどうかというリブセットの提案に対して、パターンズは文献⑨の論文での議論を完結したものとみなし、変更には否定的である(文献⑩ p. 364f.)。また橋本真は、「対自性―即自性」「表出性―道具性」の追加可能性を提案している(橋本真「社会構造分析のための概念図式としての型の変数について」『人文学』同志社大学人文学会、第六一号、一九六二年)。しかし本稿では、パターン変数の拡張の問題をテーマとはしていないので、右の問題には立入らない。

(18) *WP*, p. 52f.; p. 59, p. 98f. 参照。「それ(自己―集合体指向の変数―引用者)は、もしある社会システムが解体しても、その構成要素であるところの諸パーソナリティの、及びそれらが関与している他の諸集合体の境界維持的諸属性はそのまま残りうる」という根本的事実を述べている(*WP*, p. 98)。

(19) *WP*, pp. 45~52, p. 67f., p. 80, p. 179. 参照。パターン変数のこのようなグループینگに関して、五一年と五三年では異同があるのかもれない。(1)主体の側に感情性―中立性、集合体―自己指向、普遍主義―個別主義、客体の側に限定性―無限定性、帰属性―業績性、という箇所(*TGTA*, p. 78, Fig. 2, 邦訳、一三五頁、第二図)。(2)客体の様相として帰属性―業績性のみが取上げられている箇所(*SS*, p. 88, 邦訳、九七頁)。(3)欲求性向と役割期待のタイプわけで、第一次的に重要な変数として用いられる際の区分(*TGTA*, p. 94, Fig. 3, 4, 邦訳、一四九―一五〇頁、第三、第四図)。これらの内、(3)の箇所がグループینگに関して、*WP*のもの、発想は異なっていると思われるが、結果的に一致している。

(20) 組合せの内容よりも、そのスタイルが問題となる場合に、この略記法が便利である。また、たとえば「 A_1-O_1 」という略記法は、 A_1 のベアのどちらか一つと O_1 のベアのどちらか一つの組合せを意味する。

(21) *WP*, Chap. 2, 3.

(22) *WP*, Chap. 5.

(23) 以下では便宜のために、「タイプ2」の形式での組合せのみを、カッコを付して単に「組合せ」と呼ぶ。

(24) *WP*, Chap. 2, 3.

(25) *TGTA*, p. 76; 邦訳、一三三頁、参照。感情性―中立性のベアのうち前者が選択された場合、他の変数の二者択一が問題となるのか、ならないのか、*TGTA*の中で矛盾と受取れる箇所がある。本稿では感情性も他の変数と結びつかなければならぬと考える(橋本真、前掲論文、五七頁、文献⑩ p. 52f. を参照)。

(26) 五組のパターン変数のすべてではない組合せによって図式を作成している場合には、省略が行われているという注意は五一年の文献において繰返されている(*SS*, p. 87, 邦訳九六頁など)。

(27) *WP*, Chap. 3, p. 97f.

(28) *WP*, pp. 183~187.

(29) *WP*, Chap. 5, p. 179; 傍点引用者。この言明の萌芽は(明確ではなすが)、*TGTA*, p. 93f. 邦訳、一四九頁に見られる。

(30) 文献⑩ p. 85.

(31) 文献⑩ p. 85f. *SS*, p. 85, 邦訳、九五頁。

(32) 問題の十二組の組合せを導き出す手続きは他にもありうるが、より単純なもので代表する。

(33) また、 $A_1-O_1-A_2-O_2$ という形式になったとき、親和性の弱さに二つのレヴェルを区別することもできる。

189. 参照。
- (34) *WP*, pp. 185~187.
- (35) *WP*, p. 100, p. 164.
- (36) 『社会体系論』第五章「宗教と価値統合」の項参照。
- (37) 「パターン維持」(pattern maintenance) と「緊張処理」(tension management) が図示されるのは、五八年の論文においてである(文献⑦ p. 7) *WP*では異なる用語が図示されているが考え方そのものは同じであろう(*WP*, pp. 185~187)。五六年の書物では、図は*WP*のものと同じであるが、欄外に右の二つの用語が明記されている(*ES*, p. 19. 邦訳、上巻三〇頁)。
- (38) パーソンズは通時的な分化を「位相」(phase)と呼び、共時的な分化を「構造分化」(structural differentiation)と呼んで区別している(*WP*, p. 167 f.)。
- (39) 具体的—分析的という問題については、*SSA*, Chap. 1, 19. を参照。
- (40) A・クーン、浜口恵俊らの「活動システム」と「パターン・システム」という用語を導入すれば、明確化に役立つだろう(浜口恵俊「パーソナリティの基礎理論」本間康平他編『社会学概論』有斐閣、一九七六年所収、六三頁)。
- (41) レヴィーストローズ、荒川幾男他訳『構造人類学』みすず書房、一九七二年、第二章参照。
- (42) ベイルズの原案を、四分割された箱型で図示したことは、パーソンズの不思議な独創である(五一年の段階で既に多用されていた方式だが)。モデルIIの原形的アイデアは*WP*の中にも既に散見される。例えば、動機づけのエネルギーが「貯蔵」されるのか「消費」されるのか、また認知的—道具的要素と表出的要素のどちらが優位するのか、という二つの二者択一(*WP*, p. 166)など。また「道具的—表出的」の定義は、*WP*, p. 189. 参照。
- (43) 文献② p. 5, n. 3.
- (44) 拙稿「初期パーソンズの諸問題」『ソシオロジ』第二巻三号、一九七六年、二二頁注二四参照。
- (45) 「外的—内的」という用語は、*WP*及びその直後に書かれた論文にも、モデルIIとほぼ同じ用法で現われている(文献⑤ p. 623)。またこの軸と「自己—集合体指向」の変数が関係づけられている箇所もあるが、誤まりだろう(文献⑦ p. 7, n. 4)。
- (46) また、後にL→I→G→Aというコントロール・ハイパーキーが考えられる場合、L→IとA→Gのそれぞれの関係はパラレルではないことに注意。
- (47) パーソンズ自身のこの二つの軸の記述の順序は、文献⑦また⑩において、外的—内的が先に、次に手段的—成就的が説明されている。この順序を入替えた説明はむずかしいのではないか。
- (48) 文献⑧ p. 198.
- (49) この用語は、体系の外にある客体の意味を、言語・知識・貨幣などのシンボリック・メディアによって、普遍主義的にカテゴライズする方法を指している。
- (50) 六〇年論文の第二の図式(文献⑧ p. 208)は、第一の図式の各次元の低位次元を組みかえたものであるが、これは本稿の提起している用法と一致している。
- (51) 文献⑩ pp. 10~15.
- (52) 文献⑩ Chap. 5, 8. 「言換えれば、その関係(つまりモデルIとモデルIIを区別する必要のない場合—引用者)は、ただ相互に完全に同意しあっている『並はずれた社会学者達』(super-sociologists)の集団と『つみみ成立する』(文献⑩ p. 136)。

(53) 「このアプローチは、ある行為が適応的であるかどうかに関わるのではなく、それが適応的であると信じられているかどうかに関わっている」(ibid., p. 73. 傍点引用者)。

(54) 当事者と観察者の視点の不一致の問題は、双方で同一の図式に依拠している限りは、メンズィズの問題とは異なる性質のものである。

(55) 文献⑨では二つの軸に「平等—不平等」「自由—拘束」という解釈が与えられている(文献⑥ Technical Note, Fig. 3, 4. 参照)。これらとパターン変数の組合せとの関係も興味深い問題であろう。

(56) パーソンスの「複眼的」な本領が発揮されている論文として「Law as an Intellectual Stepchild, " Sociological Inquiry, Vol. 47, No. 3~4, 1977. を挙げておきたい。この中で、彼の複眼的あるいは多元的な思考方法は、一九三七年の段階ですでに明瞭に表現されている(拙稿「前掲論文」二三頁注二九参照)。この観点から、パーソンスがハイルズに及ぼした影響、またパーソンスのハイルズ原案の修正」という問題を考察することは、興味深い論点であるが、本稿では立ち入ることができなかった。

(57) 吉田民人、文献⑩、二三—二四頁。さらに吉田は「G 次元を」系の単位の機能的要件の充足」と修正しているが(文献⑩二六頁、傍点引用者)、彼はシステム・レヴェルを混同しているのではない。また、パーソンスの「目標」の概念は、比較に役立てるために、その具体的内容については、ほとんど空白である点が、逆説的なメリットとなっている。吉田のように「目標」の内容を限定することが、通社会的に意味をもちうるかどうか、疑問視しよう。

(58) 吉田民人、前掲論文、作田啓一「行為理論と体系理論」『思想』一九六五年第十二号、木村洋二「パーソンナリティ系と集団系の機能的系モデル」『現代社会学』第四巻第一号一九七七年。ついで木村洋二の見解を「ただけふれおくと、G 次元に「充足」が位置づけられてくるが、とく

に、パーソンナリティ系の場合に、生物学的欲求の充足に非常に近く考えられている(木村洋二、前掲論文、一四三—一四六頁)。しかし、パーソンスに則していえば「目標」と生物学的レヴェルの欲求は、独立の要因として設定されており、これは「注意主義的行為理論」の強調点の一つである。
〔基本文献などの略語〕

① SSA Parsons, T. *The Structure of Social Action*, McGraw-Hill, 1937. The Free Press, 1968. 稲上毅・厚東祥輔訳『社会的行為の構造』1・4、木鐸社、一九七六・七四年。

② TGTA Parsons, T. and Shils, E.A. (eds.) *Toward a General Theory of Action*, Harvard University Press, 1951. 永井道雄他訳『行為の総合理論をめざして』日本評論社、一九六〇年。

③ SS Parsons, T. *The Social System*, The Free Press, 1951. 佐藤勉訳『社会体系論』青木書店、一九七四年。

④ WP Parsons, T. et al. *Working Papers in the Theory of Action*, The Free Press, 1953.

⑤ Parsons, T. "Some Comments on the State of the General Theory of Action," *ASR*, vol. 18, No. 6, 1953 December, pp. 618~631.

⑥ ES Parsons, T. and Smelser, N.J. *Economy and Society: A Study in the Integration of Economic and Social Theory*, The Free Press, 1956. 富永健一訳『経済と社会』I・II、岩波書店、一九五八・五九年。

⑦ Parsons, T. "General Theory, in Sociology," in Merton, R.K. et al. (eds.), *Sociology Today*, Basic Books, 1958.

⑧ Parsons, T. "Pattern Variables Revisited: A Response to Professor Dubin's Stimulus," 1960, in Parsons, T., *Sociological*

Theory and Modern Society, The Free Press, 1967.

⑥ Parsons, T. "Equality and Inequality in Modern Society, or Social Stratification Revisited," 1970, in Parsons, T. *Social Systems and the Evolution of Action Theory*, The Free Press, 1977.

⑦ Parsons, T. and Platt, G. M. *The American University*, Harvard University Press, 1973.

⑧ Menzies, K. *Talcott Parsons and the Social Image of Man*, Routledge and Kegan Paul, 1977.

⑨ 吉田民人「A・G・I・L修正理論」『関西大学文学論集』第十一卷第六号、一九六二年。

(京都大学助手)

△訂正△

前号江原論文の末尾(六六頁)に現職(東京都立大学助手)がおちており
ました。お詫びいたします。